

「虫めづる姫君」の主題

庄野彩霞

一、はじめに

「虫めづる姫君」は、平安時代後期頃に成立した短編物語集『堤中納言物語』の一篇である。『堤中納言物語』には、「花桜折る少将」「このついで」「虫めづる姫君」など、十一篇の短篇物語が収録されている。

先行研究では、姫君が毛虫の成長を観察する行為から姫君の成長拒否を読み取り*¹、右馬助の垣間見から『源氏物語』を始めとする王朝恋愛物語が想起されるパロディ性を指摘する²などといった事が論じられている。特に、虫を愛でたり化粧を拒否したりという姫君の行動は主に「異例」と見なされる事が多いが、その点について疑問に感じた。本稿では、姫君が述べる言葉、特に冒頭で述べた言葉に注目して、物語における姫君の言動の内容を考察することで、姫君の人物像を明らかにし、物語の主題について考察するものである³。

二、虫と化粧に関する姫君の言動

作品中で、姫君が周囲の人々から批判を受けたのは、虫を愛でる事と化粧を拒む事である。この事に対して姫君が述べた言葉から、姫君の考え方を考察する。

まず第一に、虫を愛でるという行動についてである。姫君が愛でている虫は、ケムシ・カマキリ・カタツムリ・オケラ・イナゴ・ムカデなど、多様である。しかし、ケムシやオケラ、ムカデは平安時代後期までに成立した他の文学作品における用例が管見の限りでは見当たらず、それ以外の虫の用例は、カマキリが三例⁴、イナゴが二例⁵、カタツムリが三例⁶と、その数が極めて少なく、人々に好まれていない虫であったと考えられる。また、平安時代後期には姫君と同じく虫を愛でていた、藤原宗輔という公卿が実在した。宗輔は「蜂飼大臣」と呼ばれるほど蜂を愛でていたが、世間はその行為を「意外な事」や「無駄な事」と評していた⁷。

以上の事から、周囲の批判はもっともな事と確認できる。では、なぜ姫君は周囲から批判されながらも虫を愛で続けたのであろうか。その理由として、虫を愛でる事について親から外聞が悪くなると忠告された時に、姫君が述べた言葉を次に示す。

「苦しからず。よろづのこと、もとをたづねて、末をみればこそ、事はゆゑあれ。」

いとおさなきことなり。烏毛虫かはむしの蝶とはなるなり」そのさまのなり出づるを、取り出でてみせたまへり。

傍線部の「もと」と「末」は対の言葉であり、「よろづのこと」、つまり万事における根源とその結果という意味で、傍線部は「人々は蝶だけをもてはやすが、蝶だけを見るのではなく、その根源である毛虫を収集・観察し、探求した後に蝶をみることで、毛虫から蝶に変化する虫の情趣が感じれる」ということになる。この言葉は、結果としての蝶のみを賛美する、一面的な見方による評価を嫌い、ものの根源的な事をこそ探究してから評価すべきという、姫君の信念を表しており、姫君はこの信念に基づいて虫を愛でたのである。

第二に、姫君が周囲から批判されるのは、化粧をしないという事である。化粧は平安時代における女性の習慣であり、それを拒否した為に批判されたのである。姫君は、化

粧を拒否するという行動の理由について次のように述べている。

「人はすべて、つくろふところあるはわろし」とて、眉さらにぬきたまはず、齒黒め、「さらにうるさし、きたなし」とて、つけたまはず、いと白らかに笑みつつ、この虫どもを、朝夕べに愛したまふ。

「つくろふ」とは、化粧や服飾などで外見を飾り立てる事である。したがって、傍線部は「人は皆、外見を飾り立てるところがあるのはよくないことである」ということになり、この言葉には、外部の装飾という表面的な行為や、その行為に対する周囲の一時的な評価を否定する、姫君の価値観がうかがえる。

また、服装の好みも特徴的で、姫君は練り色の桂や白い袴を好んで着用している。この様な服装は、平安時代頃において年配女性が着用する色合いであり、若い姫君が着用するような服装ではない。それを好んで着用しているのは、飾り立てた外見に対する一時的な評価を否定する価値観に基づくものと考えられる。そして、この価値観は、姫君が虫を愛でる行動の理由として述べた言葉に表れた、一面的な見方による評価を嫌う信念に通じている。

以上の事から、姫君は、事物が表面的に変化した結果に対する評価を否定し、その根源的な事を重視する信念の実践として、虫を愛で、化粧を拒み、好みの色合いの服を着ていたのであると考ええる。

三、行動を支える発言

次に、虫を愛でる姫君に興味を持った右馬佐という男の行動に対する姫君の反応として、作り物の蛇を贈られる場面と、垣間見をされる場面に注目し、考察する。

まず、姫君は、右馬佐から贈られてきた作り物の蛇を本物の蛇と見間違えて、次のような反応を示す。

君はいとのどかにて、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」とて、「生前の親ならむ。な騒ぎそ」と、うちわななかし、顔、ほかやうに「なまめかしきうちしも、けちえんに思はむぞ。あやしき心なりや」と、うちつぶやきて、近く引き寄せたまふも、さすがに、恐ろしくおぼへたまひければ、立ちどころ居どころ、蝶のごとく、こゑせみ声に

傍線部の「生前」は前世の事で、姫君は現前の蛇を前世の親なのであろうとして、姿形の違いによって対応が変わる事を批判している。しかし、実際の行動は、蛇から顔を背け、飛び回る蝶の様に落ち着きが無く、蟬のように苦しうにしぼり出すような声を出すなど、蛇を恐れて怯えている。この行動は、蛇を恐れるべきでないとする発言と一致していない様に思われるが、波線部に見られる様に、恐怖に怯えながらも蛇を身近に引き寄せている事から、姫君は蛇という恐怖の対象を前に感情を一切口にせず、自身で述べた言葉を実践しようとしていると考える。

次に、右馬佐に垣間見をされる場面だが、垣間見に気づいた姫君が慌てて邸内に駆け込んで描写から、姫君が垣間見された事を恥ずかしいと感じている事がわかる。しかしその後、右馬佐から垣間見を告げる歌が届き、気味の悪いケムシを愛でているところを見られたと、様々に愚痴を言う女房達に対し、姫君は「思ひとけば、ものなむ恥づかしからぬ。人は夢幻のやうなる世に、誰かとまりて、悪しきことをも見、善きをも見思ふべき」

と述べる。姫君は、はかなく頼りない世の中では物事の善悪すら判断できないのだから、垣間見という人の見た目に対する善し悪しの判断も不可能であるとし、判断のつかない垣間見を恥ずかしがる事などないという事を述べているのである。この言葉には、物事の見た目による判断を批判する、姫君の価値観がうかがえる。

垣間見を恥ずべきでないとするこの発言は、垣間見を恥ずかしい事として邸内に駆け込む行動と一致していない様に思われるが、姫君の言葉には一言も羞恥の感情が表れていない事から、姫君は羞恥の感情を抑制しつつ、物事の判断における自身の考え方を述べていると考える。そして、物事の見た目による判断を批判するという価値観は、作り物の蛇を贈られた時に姫君が述べた、存在の根源的要素による判断を重視する信念に通じているといえよう。

以上の事から、姫君は、右馬佐から贈られた作り物の蛇や垣間見に狼狽しながらも一切感情を口にする事なく、人や事物の本質による判断を重視する信念に基づいて発言していたのであると考えられる。

四、物語冒頭の言葉と姫君の人物像

姫君の考え方の根幹にあるものとして、物語冒頭で姫君が述べた言葉に注目する。「虫めづる姫君」の冒頭において、姫君の紹介の後すぐに最初の姫君の発言が始まる。

人々の、花、蝶やとめづるこそ、はかなくあやしけれ。人は、まことあり、本地たづねたるこそ、心ばへをかしけれ

「花、蝶やとめづる」とは浮薄で頼りないものを愛で、賛美するという事を表現した言葉であり、姫君はそれを頼りなく不可解な事として批判している。そして、姫君がすばらしい心がけとしているのが「本地たづねたる」、つまり本質を探究するという事である。この言葉は「浮薄なものを花よ蝶よと愛でてでもてはやすことは不安定で頼りなく、不可解である。人にある真実や真相といった根源的な事を知る為、その人の本源や本質を探究することこそ、すばらしい心がけなのである」という意味で、人の本質を見極めることを重視する姫君の信念を表わしていると考えられる。そして、この信念は、これまでに考察した、根源的な事を重視する信念や本質的な部分による判断を重視する信念に通じている。

以上の事から、物語における姫君の全ての言動は、冒頭で姫君が述べた、人の本質を見極めることを重視する信念に基づくものであり、姫君は、人や物事を判断する際に強い意志と行動力で人や物事の本質を探究し、見極めようとする人物であると考えられる。

五、おわりに

先行研究において、虫を愛でたり化粧を拒んだりする行動は、単に異例な行動として否定的に捉えられてきたが、姫君の言葉を検討すると、表面的に変化した事物への一時的な評価を忌避し、事物の根源を探究した上での判断を重視する信念に基づくものであることがわかった。また、作り物の蛇を贈られた時と垣間見された時の、一見一致していない様に思われる反応は、恐怖や羞恥で狼狽しながらも感情を一切口にせず、見た目という表面的な姿形ではなく人や事物の本質的な部分による判断を重視するという信念を述べ、実践しようとしていると考えられる。

そして、強い意志と行動力で、物事の本質や根源を探究する姫君を描いた「虫めづる姫君」は、人や事物の判断において周囲の意見に流されることなく、その本質を見極めた上での判断を重視すべきという考え方を表わした物語だったのである。

¹池田和臣「文学的想像力の内なる『虫愛づる姫君』—もうひとりのかぐや姫—」（『中央大学文学部紀要』七三、一九九四年三月）、井上新子「『虫めづる姫君』の地平」（『国文学攷』一五八 一九九八年六月）、稲賀敬二「堤中納言物語の〈虫めづる姫君〉異様な言動を演技と読めば」（『国文学 解釈と教材の研究』二七・一三、一九八二年九月）、辛島正雄「『虫めづる姫君』管見—「かは虫と〈少女〉」—」（『文学論輯』三九、一九九四年一月）、立石和弘「虫めづる姫君論序説—性と身体をめぐる表現から—」（『王朝文学史稿』二一、一九九六年三月）、中嶋尚「虫めづる姫君論」（『千葉大学教育学部研究紀要』一・三八、一九九〇年二月）山岡敬和「〈性愛〉の言説—「虫めづる姫君」を読む—」（『源氏物語と古代世界』 一九九七年、新典社）等を参照した。

²阿部好臣「引用構造の自己同一性（上）—『虫めづる姫君』論ふたたび—」（『語文』六〇、一九八四年六月）、阿部好臣「引用構造の自己同一性（下）—『虫めづる姫君』論ふたたび—」（『語文』六一、一九八五年二月）、小島雪子「物語史における『虫めづる姫君』（下）—笑われる姫君と物語のかかわり—」（『文芸研究』一五九、二〇〇五年九月）、三谷邦明「擬く堤中納言物語—平安朝後期短篇物語の言説の方法あるいは虫めづる姫君を読む—」（『平安時代の作家と作品』一九九二年、武蔵野書院）等を参照した。

³使用するテキストには、島原松平忠房旧蔵本を底本とし、広島大学蔵浅野家旧蔵本によって校訂がなされた『堤中納言物語』（新編日本古典文学全集所収）を用いた。底本と校訂に用いられた写本は、誤謬誤脱が少ない良本であるとされる。

⁴『新猿楽記』（群書類従第九輯文筆部卷第一三六）序、『夫木和歌抄』下卷（校註国歌大系第二二卷）第二七蝸牛、『梁塵秘抄』（新編日本古典文学全集）卷第二、歌番号三三一にその例が見られる。

⁵『梁塵秘抄』（新編日本古典文学全集）卷第二、『散木奇歌集』（新編国歌大観）第一〇雑部下、歌番号一〇六九に用例がある。

⁶『和漢朗詠集』卷下（新編日本古典文学全集）無常、『夫木和歌抄』下卷（校註国歌大系第二二卷）第二七蝸牛に用例がある。

⁷『今鏡』（新訂増補国史大系）第六ふちなみの下「から人のあそび」一三八頁、『古事談』（新日本古典文学大系）第一一九二「藤原宗輔鳥羽院御前の群蜂を捌く事」一一五頁、『十訓抄』（新編日本古典文学全集）上の第一「人に恵を施すべき事」一ノ六の三七頁による。